


元気いっぱい、感動いっぱい、友達いっぱい！ 踏みだそう最初の一步「オープン・ザ・ドア！」

 国立妙高青少年自然の家
コミュニケーションマガジン

Open *the* Door!

Vol.4



特集 I

子どもを**本気**にさせる

アドベンチャープログラム

妙高ジュニアアドベンチャー2009

特集 II 妙高教育プログラム紹介
源流探検・スノーシューハイキング

平成21年度事業レポート

データで見る国立妙高

MYOKOに寄せられた声

子どもを本気でやる

アドベンチャープログラムがここに

——妙高ジュニアアドベンチャー2009

本事業は、平成21年度事業方針における重点テーマ「次代を担うリーダーの育成」を目的とする取組である。

「リーダーの育成」が喫緊の課題として設定された背景の一つには、天然資源に乏しいわが国が今後とも世界から『品格ある国家』として認識され、信頼を得つつ発展し、知的存在感を保持しながら成長を遂げていくためには、国際社会で活躍できる優秀な人材を育成することが重要であるとする、「文部科学省における国際戦略（提言）」（平成17年9月／文部科学省における国際戦略検討会）があると考えられる。また、この中で、国際社会で活躍する人材を育成するためには、義務教育段階から世界、国際社会に貢献したいという夢や目標を持って学習に取り組む「意欲」を引き出すことが重要であることが示されている。

平成18年2月に文部科学省が示した「子どもの意欲・やる気等の向上・低下に係る調査研究成果・事例の収集調査（結果の概要）」では、子どもの意欲を「自己効力感（課題を達成できる可能性の認知）」や「積極性」、あるいは「自己肯定（受容）感」、「主体性」、「リー



「リーダーシップ」など子ども自身が自己を認め、様々な事象に前向きかつ積極的に取り組む力やその行動に着目して捉えている。そして、その上でこれらの子どももの「自己効力感」、「積極性」や「主体性」を向上させ、他者との連帯感を得られ、意欲的な活動傾向を増加させる活動・取組として、成功体験・達成経験を伴う野外体験活動などを挙げている。

以上の提言等とこれまでの国立妙高青少年自然の家が実施してきた事業成果及びリーダーの育成に関する先行研究を、国立妙高青少年自然の家の施設業務運営委員会・プログラム企画専門部会などで十分に検討した結果、困難に立ち向かおうとする力、自ら考え行動する力、創造力を働かせ工夫して課題を解決しようとする力、集団を目的やねらいへ導こうとする力、集団内の人間関係をよりに円滑にしようとする力、を青少年のリーダー性を特定する要素(資質・能力)として絞り込んだ。

本事業では、国立妙高青少年自然の家が蓄積している青少年を対象とした長期キャンプについてのノウハウをフルに活用し、現代を生きる青少年に関わる課題の一つである「リーダー性の育成」に特化した長期間のチャレンジキャンプを展開する。そのため、各参加者の資質・能力の向上を目指す方策として、個人活動(セルフチャレンジ)と集団活動(チームチャレンジ)を取り入れた野外活動場面を意図的に設定する。具体的な活動としては、長距離サイクリング(妙高 寺泊間約120キロや佐渡島一周約180キロ)を中心とする陸上活動だけでなく、シーカヤックでの越佐海峡横断(寺泊 赤泊間約40キロ)を中心とする水上活動も取り入れることで、多様な活動プログラムの設定が可能となった。

また、「参加者のだれもがリーダー」を合言葉に、一人一人の参加者がもつ(あるいは秘めている)リーダーとしての資質・能力を発揮しやすい環境を創り出すことで、本事業によって獲得されたリーダーとしての資質・能力の持続性についても追跡した。



この夏 出会う 新しい自分

妙高ジュニアアドベンチャー2009

14泊

15日

のチャレンジ



7月
26日(日)
~
29日(水)
【第1ステージ】
トレーニング
キャンプ



自分はどうなめあてで取り組むか、
グループではどんなことができるのか。

7月26日(日)午後、抽選で選ばれた24名の子どもたちとその保護者が国立妙高青少年自然の家が集まった。約2週間前の事前説明会とは一味違う気持ちでの集合となったようだ。いよいよ今日から2週間のチャレンジが始まる。開校式の後ともう一度どんな人が集まっているのか様子を見合っ。簡単なゲームでまずは名前を確認しあつた。

その後、キャンプ活動全体を通してふりかえりの手法として使う「マインドマップ」の学習が始まる。6人ずつの4グループに別れ「マインドマップ」の描き方や使い方を学ぶ。そして、最後に2週間のキャ

ンプでは自分はどうなめあてで取り組むか、グループではどんなことができるのかの考えを出し合い発表しあつた。

2日目からは、野尻湖周辺の湖楽園キャンプ場に移動し、テントで宿泊しながらのカヌートレーニングが始まった。雨が降ったりやんだりするあいにくの天候の中、第3ステージで越佐海峡を横断のためのカヌー技術と長距離キャンプに必要な基本的キャンプ技術(テント設営や野外炊事の仕方など)を学ぶ。

カヌートレーニングではパドルの使い方やカヌーが転覆したときの着脱の方法等を学んだ。初めてのカヌー体験。最初は思うようにカヌーが進まず、体力的にも精神的にもきつい様子である。しかし、3日目には野尻湖を周遊できるほど上手にカヌーを操作することができるようになった。

また、キャンプ生活では、テントの張り方や野外炊事の方法を学んだ。グループで話し合い、協力しながらの活動を体験する。はじめは時間がかかるが徐々に役割分担や助け合いが生まれ、スムーズに活動できるようになって行く。

夜はマインドマップでのふりかえりを一

一人で行った後、グループ内で発表しながら、明日のめあてを確認しあった。

【第2ステージ】
サイクリング
トレーニング、
長距離サイクリング

7月
30日(木)
~
8月
1日(土)



このステージではサイクリングトレーニングと初めての長距離サイクリングを実施。

国立妙高青少年自然の家周辺でサイクリング技術と交通マナーを学んだ。天候は雨。視界も悪かったが、本番での活動も同じ状況が予想されるので、子どもたちは真剣に取り組んでいた。

翌日から妙高から寺泊までの移動型キャンプが始まった。最初は大潟キャンプ場まで約40kmの行程。天気は晴れ。水分補給の仕方やベース配分も考え、自転車をこぎ続けた。

キャンプ場に到着した子どもたちは、自分たちだけでテントを設営したり、野外炊事をしたりする活動を体験し、話し合いで役割を決めながら協力の仕方を学んでいた。

翌日は、寺泊までの約70kmの行程であ

る。交通量の多い国道を安全に走行したり、苦しい上り坂を上ったりするために互いに「後ろから車」「段差があるよ」「あともう少してってっぺん」など声を掛け合い目的の地まで向かう姿も生まれる。途中休憩しているとき、新聞で情報を知った近くの方からスイカの差し入れをいただいた。思わぬ差し入れに子供たちも疲れが癒された。

そして、寺泊の目的地にゴール。みんなで健闘をたたえあう。その夜は、第2ステージをふりかえり第3ステージのめあてを話し合った。



【第3ステージ】
佐渡海峡
横断キャンプ

8月
2日(日)
~
4日(火)



今日からは、湖とは違う波の高い海でのカヌートレーニングが始まる。

波にとまどいながらも練習を始めた。中には波に酔う子どもや、思うように進まず、体力を消耗してしまう子どももいる。2日後に佐渡海峡を横断することができるのか？ちよつと不安になる1日であった。夜のふりかえりでは、本番に向けてどのような気持ちで取り組むかを考え話し合った。

また、ここでもご近所の方が、新聞で見たとわざわざ応援に来てくださり、差し入れもしていた。

海でのトレーニング最終日(9日)は天候にも恵まれ、波になれるための活動や海でのカヌー操作のこつを学んだ。少し沖まで漕ぎ出し、本番に備えた。いよいよ佐渡海峡横断当日。まだ暗い早朝に準備を整え5時ごろ寺泊港に集合。出発式を行い、みんなで気合を入れ出港した。

漁船3隻に囲まれながら、まずは、6人の子どもたちがシーカヤックに乗り込む。横断は一人一人が精一杯こいで次のメン



バーと交代しながら進む。天候は曇り時々晴れ。漕いでも漕いでもまだ佐渡は近づかない。早朝はほとんどなかった波も、昼を過ぎたころからだんだん大きくなる。3隻の漁船の距離も少しずつ離れていった。

後半はさらに波も高くなり、波で他の艇が見えなくなる。子どもたちにも疲労の色が見えている。途中波に酔ってしまう場面も。しかし、佐渡の赤泊港がはつきり見えたと、誰がカヌーに乗るか子どもたちの話し合いが始まった。そして最後に漕ぎ出す仲間に思いを託し、自分のネームプレートを手渡す場面もあった。

そして、ゴール。全員がカヌーをつないで約11時間かけ赤泊港に到着。地元の方數十人も出迎えてくれた。

疲れはピークに達していたが、やり遂げた時の達成感は充実していた。



いよいよ佐渡一周長距離サイクリングの始まり。小木港で自転車のチェックをし、いよいよスタート。小木から入崎キャンプ場まで約70kmを3グループに分かれスタート。佐渡の起伏激しい道のりを励まし合いながら走った。本格的な長距離サイクリングと夏の暑い日ざしや自転車トラブルも重なり、徐々に体力と気力を奪われる子どもたち。一人がりタイヤを訴えると連鎖し、次々とリタイヤ希望が出てくる。子どもたちの中に、ちよつと休んで車で移動し、また自転車に乗れば良いという安易な考えが生まれる。その夜、全員を集め、一度リタイヤしたら、その日は自転車に乗れないことを伝えた。そうすることで、安易に休憩をとろうとする考えを一掃した。

佐渡2日目の入崎から姫崎まで約70kmには、佐渡で一番の難所、跳坂(Z坂)が待っている。昨日の「リタイヤしたらもうその日は自転車に乗れない」という思いから、子どもたちは、ちよつと苦しくとも、弱音を吐かず、難所を走破して行く。そして互

8月
5日(水) ~ 7日(金)
【第4ステージ】
佐渡島一周
サイクリング
キャンプ





に。子どもたちの話し合いが始まる。今までの体験を生かし、どのようにゴールまで行くのか。一人一人が自分の思いや願いを出し、話し合いは続いた。スタッフは何も



いに励ましや安全確認の声を掛け合い見事全員が姫崎キャンプ場まで走破した。
佐渡最終日は朝から土砂降りの天気。大雨の中を姫崎から小木まで約40km狭い道や急な坂道、暗いトンネルなど気をつけて走行。小木に到着したときはみんな手で手をたたいて喜び合った。

8月
8日(土)
9日(日)

【第5ステージ】
ラストラン、
ふりかえりキャンプ



いよいよ最後のサイクリング。直江津から妙高までの上り坂約40kmに挑む。国道18号線の側道を通って初めは順調に進んで行く。しかし、最後はスタッフが安全確認をする走行ではなく、子どもたちだけで行かせたい、いきたくないという思いが強くなる。そこで、自然の家まで急な上り坂残り2kmを子どもたちだけで走行すること

最高の達成感と充実感。

指示を出さず、ちょっと離れた後ろからついて上ることとした。

いよいよラストラン。子どもたちは自分に役割を決め、一人一人が今できる精一杯のことをしようと走り始めた。今まではスタッフがしていた安全確認の動きも子どもたちが見事にやっている。緊張感の中にも子どもたちの生き生きとした声や動きが表出した。そして、ゴール。保護者や自然の家の職員が出迎える中、笑顔での到着となった。最後には、全員が達成感と同時に感謝の気持ちを伝えあった。

最終日は、アンケートと2週間のふりかえりを文章に書き留めた。閉校式では、代表3名が感想を発表。自分の成長、今まで気づかなかった周りの人の優しさに触れ、感謝の気持ちでいっぱいになり、涙を流しての感想発表となった。



【最後に】

この2週間、子どもたちは常にふりかえり、考え、行動した。時にはぶつかり合い、時には支えあいながら。そして自分の中に新しい自分に気づき、それを受け入れ、大切にしたい。

このチャレンジキャンプは子どもたちを本気にさせる仕掛けがある。それは、国立妙高青少年自然の家が考えるリーダーとしての5つの力とつながっている。5つの力とは、困難に立ち向かおうとする力、自ら考え行動する力、創造力を働かせ工夫して課題を解決しようとする力、集団を目的やねらいへ導こうとする力、集団内の人間関係をより円滑にしようとする力である。

この5つの力を引き出すために、困難な状況を設定し、子どもたち自らが解決できるように振り返りや話し合いの時間を十分に与えた。そして、それを繰り返すことで、子どもは本気になり、次々と困難な状況をクリアしていったのである。

体験活動の「質」を問う

豊かな体験活動推進フォーラム



生活体験や自然体験などの直接体験が不足する現代の子どもたちにとって体験活動の機会と場の提供は極めて重要であると考え、その推進に向けて全国小学校行事研究会と国立妙高青少年自然の家は、これまでに3回の全国フォーラムを開催してきました。

4回目を迎える今年度は、文部科学省委託事業「青少年の課題に対応した体験活動推進プロジェクト」を受託し、平成21年10月24日から25日に国立妙高青少年自然の家（新潟県妙高市）を会場に開催いたしま

した。

1日目は、文部科学省初等中等教育局児童生徒課課長・磯谷桂介氏による基調講話「最新青少年教育の動向」、シンポジウム「豊かな体験活動の進め方伝授します」を実施。磯谷氏は、学校教育における体験活動の施策動向を説明し、全国の小学校に向け、長期宿泊体験活動を推進する必要性について語られました。続くシンポジウムでは、國學院大学の宮川八岐氏をコーディネーターに、宮川氏の基調提案ののち、学



校教育（石塚忠男氏・越谷市立大相模小学校）、冒険教育（河合宗寛氏・日本アウトワード・バンド協会）、高等教育（坂本昭裕氏・筑波大学）、青少年教育（小林真一氏・国立青少年教育振興機構）の各シンポジストがそれぞれの視点から豊かな体験活動推進のためのポイントを参加者に提案しました。フロアからも活発に質問が出され、終了時刻をオーバーするという一幕もみられました。

2日目には、全参加者が自然体験とコミュニケーション体験に分かれて参加する「妙高体験型ワークショップ（プログラム体験会）」と千葉県知事・森田健作氏による特別講演会「早ね早おき朝ごはんで拓く子どもたちの未来」を実施。講演の中で、森田氏は、「ご自身のエピソードを交えなが

ら規則正しい生活習慣の大切さを熱弁されました。また、子どもたちの健全な育成のために、大人の関わり方が必要であるとされました。

期間中、国立青少年教育振興機構の中部・北陸ブロック五施設（立山、能登、若狭湾、乗鞍、妙高）、全国小学校学校行事研究会をはじめとする14団体が、日頃の体験活動推進に向けた取組をブース（出店）形式で紹介し、参加者に対して積極的に情報発信・普及を行い、好評を博しました。

～平成22年度の予定から～

次年度の開催日は、平成22年11月13日から14日にかけて国立妙高青少年自然の家で開催することが決定しています。ぜひ、多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております。

ミクロネシア 少年少女自然体験交流事業

ミクロネシアの子ども 30 名を日本に呼び、自然環境や文化、人々との交流等の体験活動を通して、日本についての理解を深めることを目的とした交流事業である。(主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構国際課) 全 12 日間に渡る事業の内、後半の 4 日間(6 / 26 ~ 6 / 29) を妙高青少年自然の家企業画事業として実施した。



1日目

ようこそ妙高へ!

東京からバスに揺られてやってきた一行には少し疲れが見えた。無理もない、自国を旅立つてから 7 日目の午前であった。そんな一行を元氣付けるべく出迎えたのは、自然の家職員一同と、地元妙高市の小学校 6 年生児童 100 名である。児童等は、事前に練習したであろう英語の挨拶や歌、手拍子などで歓迎の気持ちを精一杯表した。歌や

手拍子に感激した、ミクロネシアの子どもは、積極的に児童等の中に入り握手を交わした。自発的な交流が生まれた。

午後、職員による人数集めゲームの後、5・6 人グループに分かれてオリエンティングを実施した。子どもたちは、暑い日差しの中、地図を片手にコースに飛び出して行った。施設内に広がっているオリエンティングコースは、そのほとんどが林間であり、コナラやカラマツの林を通り抜け

たり、流れる沢を横断したりする。自然を満喫することができた。

2日目

ニホン体験

妙高プログラムの 2 日目は、日本の文化に触れてもらうため、長野県長野市にある善光寺参拝と、チビッコ忍者村の忍者体験を実施した。日本を代表する木造建築の一つを見学し、手裏剣投げやアスレチックのような修行を体験することで、大変楽しい思い出の一日となった。日本の家族と良い出会いができた。

3日目

さよならニホンの家族

2 日目の夕方から丸一日を一緒に生活した日本の家族と最後に過ごすフェアウェルパーティーが始まった。子どもたちは、互いの近況報告をしあうなどして、ひとしきり語り合った後、お世話になった日本の家族と同じテーブルに着いた。

会食の合間にミクロネシアの 3 地域子どもたちから、お礼の発表があった。マーシャル地域の子どもの民族舞踊、チューク地域の子どものスティックダンス。コスラ地域の子どもの合唱などである。それぞれ日本との交流をきっかけに熱心に練習に取り組んできたことがうかがえる出来栄であった。会場に居合わせた一般客からも盛大な拍手を贈られるなど、温かい雰囲気の中で会が進められた。パーティーの終盤には、会場の各所で日本の家族との涙の抱擁や記念撮影をする姿が見られた。たった一日という短い時間ではあったが、名残惜しさがひしひしと伝わってきた。

4日目

日本の小学生との交流

妙高高原南小学校にて、高学年児童の企画による交流活動が催された。

前半は、ミクロネシアの子どもの発表や妙高高原南小学校の創作ダンスと一緒に踊る等、全校での交流活動を展開した。後半は、書道、茶道、日本の遊びの 3 つの活動を順番に体験した。児童がホスト役としてミクロネシアの一人一人の子どもに付き添い、体験の仕方や遊びのコツなど、ジェスチャーを交えて教えていた。初めはぎこちない様子で案内をしていたが、次第に説明がスムーズに行くようになり、段々と交流が深まっていった。書道体験では、筆の運びについて寄り添うようにして指導する子ども姿。日本の遊び体験では、お手玉が上手なミクロネシアの子どもが、逆に日本の子どもに教える姿が見られた。それぞれの国の子どもたちにとって、体験を通して心を通わせていくことが、言葉の垣根を越えて互いに理解を深めていく最良の方法であった。

玄関前には、旅立つミクロネシアの子どものバスを、元気に手を振って、バスが見えなくなるまでいつまでも見送る妙高高原南小学校の子どもたちがいた。



環境教育指導者養成研修

東部ブロック

(平成21年10月20～23日実施)

本研修は独立行政法人教員研修センターが主催となり、文部科学省と独立行政法人国立青少年教育振興機構が共催となつて行つた研修会である。

研修の目的は、ESD（持続可能な開発のための教育）および学習指導要領の改訂を踏まえた環境教育を推進する上で必要な資質・能力の向上を図るとともに、各都道府県における研修の講師を育成することであり、受講者は各都道府県の教育委員会からの推薦を受けた教員67名が参加した。国立妙高青少年自然の家では昨年度に引き続き、2年連続での開催となつた。

文部科学省初等中等教育局教育課程課の村山哲哉教科調査官の他、全国で環境教育を実践している著名な方々を講師として迎えた。

1日目は村山氏による「これからの環境教育の展開方策及び研修の進め方について」講義をしていただいた。そして文部科学省からの研究指定を受けた宮城県気仙沼市の小・中・高等学校の事例報告がなされた。

2日目は「持続可能な社会を目指した環境教育」「ESDにおける環境教育」の講義の後に、フィールドワークを行った。

フィールドワークは妙高独自の自然環境を活用したESDを受講者に体験する研修である。今回のフィールドワークは7月に開催された妙高ネイチャープログラム指導者養成研修を踏まえ、「妙高火山の形成過程と我々に及ぼす二面性」というテーマを設



定した。妙高火山を中核教材として、火山起源の温泉や土壌、気象や植生、地域の文化・伝統、地域産業等を有機的に捉える内容にした。全体会の中でこれらをプレゼンテーションで学んだ後に、妙高ネイチャープログラムの「妙高火山」「ブナ林探検隊」「源流探検」を希望選択で体験した。

受講者からは「妙高火山という地域に根ざした教材を生かして環境教育を行っていることは大変勉強になった。自分の住む地域でどんな教材があるかを考える良い機会となった。」「これまでは単なる美しい景色としてだけの見方をしていたが、その原因を理解することにより、視野を広げることができた。」などの感想が寄せられた。

3日目は、小・中・高等学校分科会に分かれ、講師によるワークショップがなされた。そして最終日は全体の総括によって、開会した。

本研修は我が国においてトップレベルの環境教育の研修であり、妙高ネイチャープログラムが受講者から高い評価をいただいたことは、国立妙高青少年自然の家にとって大きな存在意義を示したことになった。妙高で学んだ受講者には各都道府県の環境教育のリーダーとして活躍されることを願っている。

心の冒険教育指導者養成研修

【期 日】

平成21年6月12日(金)～14日(日)

コース

平成21年6月13日(土)～14日(日) 1泊2日

コース

平成21年6月12日(金)～14日(日) 2泊3日

【参加者】

コース 25名 コース 19名

【講師】

コース 杉村 厚子

プロジェクトアドベンチャージャバントレーナー

コース 関 智子

プロジェクトアドベンチャージャバントレーナー

【趣 旨】

児童・生徒のコミュニケーション能力の向上に資する指導法について研修し、実際の教育現場で集団内の一人一人の信頼と安心を構築することのできる指導者を育成すること、妙高アドベンチャープログラムの指導者を育成することを目的とした。

本研修では、参加者のニーズに答えられるよう2つのコースを設定した。

【コース】

グループの力を活かす教育手法コースとして、1泊2日で実施した。「妙高アドベンチャープログラム」を用いた人間関係づくりの活動を生かし、青少年一人一人の安心と信頼を構築する指導方法について理解を深めることを目指して実践的な活動が展開された。

【コース】

妙高アドベンチャープログラム習得コースとして、2泊3日で実施した。「妙高アドベンチャープログラム」のプログラム指導のために必要な知識や指導技術の習得を図り、研修終了後に即実践が可能なプログラムの提供を目指して実践的な活動が展開された。

【成果】

今回の参加者のうち、初めての参加者が16名おり、心の冒険教育の普及につながった。また、妙高アドベンチャーの指導者を認定するコースの参加者のうち4名は、研修のち当自然の家の外部研修指導員として、利用団体の講師を務めた。

今回、学校関係者の方が7名ほど参加された。青少年の心の支えとなるような手法の一つとして、青少年の指導者に携わる方には、ぜひ、この事業について知っていただきたいと思う。



【事業の実際】

<コース>

	6月13日(土)	6月14日(日)
午前	【講義・演習】 心と体の準備運動	【講義・演習】 課題解決型アクティビティ
午後	【講義・演習】 集団づくりに生かすアクティビティ	【講義・演習】 ふりかえり
夜	【講義・演習】 妙高アドベンチャーの理念と概念	

<コース>

	6月12日(金)	6月13日(土)	6月14日(日)
午前		【講義・演習】 課題解決型アクティビティ	【講義・演習】 課題解決型アクティビティ
午後	【講義・演習】 心と体の準備運動	【講義・演習】 課題解決型アクティビティ	【講義・演習】 ふりかえり
夜	【講義・演習】 妙高アドベンチャーの 理念と概念	【講義・演習】 エレメントの理解	

学校長期自然体験活動指導者養成研修

小学校学習指導要領「特別活動」学校行事の(4)遠足・集団宿泊的行事では、「自然の中での集団宿泊活動など平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然の文化などに親しむとともに、人間関係などの集団生活の在り方や公衆道徳などについて望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」とある。集団宿泊活動については、望ましい人間関係を築く態度の形成などの教育的な意義が一層深まるとともに、高い教育効果が期待されることなどから、学校の実態や児童の発達段階を考慮しつつ、一定期間(例えば1週間(5日間)程度)にわたって行うことが望まれる。その際、児童相互のかわりを深め、互いのことをより深く理解し、折り合いを付けるなどして人間関係などの諸問題を解決しながら、協調して生活することの大切さが実感できるようにと解説されている。

その小学校が実施する1週間程度の自然体験活動において、計画・立案に対して助言を行う。活動全体の様子を把握し、全体指導を行う。事業終了後に学校が行う評価について助言を行う。以上の内容を支援・指導するための人材を養成することを目的として実施した。本事業は、前半1泊2日、後半1泊2日に参加した方に全体指導者として、認定をした。

実施したプログラムは、前半は、「全体指導者の役割について」のオリエンテーションを皮切りに、上越教育大学特任准教授伊佐貢一氏による「学校教育における体験活動の意義」の講義、体験活動の指導法として「妙高アドベンチャー」安全管理の講習では「普通救命救急法」を消防署員の方から学び、「リスクマネージメント」で安全管理の必要性、重要性を学んだ。自然体験活動の技術では「野外

炊事の特徴の技術」「源流探検」を行い、自然の家のプログラムを実際に体験してもらうことにより、子どもたちの立場、指導者としての立場など、角度を変えた視点で取り組んだ。後半は、上越教育大学准教授橋本定男氏による「教育課程と体験活動の関連」の講義、小学校長期宿泊プログラムの事例発表」として、新潟県妙高市で市内の6年生を対象として実施されている妙高フレンドスクールの全体指導者として活躍されている自然学校ねぎぼうず代表大矢かおる氏が事例を紹介した。実際に活躍をされている方の話とあって、参加者たちは熱心に耳を傾けた。

体験活動の指導法として「ラボラトリー方式の体験学習・コンセンサスを得る」では、話し合いの方法を学び、プログラムの企画・立案を実施した。4泊5日で、妙高青少年自然の家を舞台にどのようなプログラムができるかを、参加者たちをいくつかのグループにわけ、作成してもらった。作成したものを発表し、互いに協議し、指摘されたところを検討・修正を加えて、最終的にプログラムを完成させた。

成果は、今回の研修で35名の全体指導者の養成を行うことができた。また、本研修で知り合った方々でお互いにネットワークを広げる動きもあつた。関係機関との連携を図りながら、事業の企画・運営を行った結果、有機的な連携を図れた。課題としては、小学校への全体指導者の認知度が低いため、実際の需要についてどうなるかなどの課題がある。また、スキルアップ研修の場の必要性がある。

国立妙高青少年自然の家(以下、妙高自然の家)には、施設周辺の自然環境を活用した活動プログラムがある。現在、33種類の活動プログラムがあり、妙高ネイチャープログラムと呼んでいる。平成22年度の実績として32団体から妙高ネイチャープログラム外部研修指導員への指導依頼があり、1,476人の利用者に対して、のべ83人の外部研修指導員を派遣した。

妙高ネイチャープログラム指導者養成研修 (平成21年7月3～5日実施)

妙高ネイチャープログラム外部研修指導員の資質・指導力の向上を図るために、妙高自然の家では毎年、妙高ネイチャープログラム指導者養成研修を実施している。対象は環境教育指導者を目指す人、教職員、現在妙高ネイチャープログラムに登録している人である。今年度は17名が参加した。

本研修の中で、もっとも有益だったのは、上越教育大学大学院教授の藤岡達也氏による『ESD(持続発展教育)と自然の二面性を重視した地域環境教育』についての講義であった。

ESDとは、地球規模の環境破壊や、エネルギーや水などの資源保全が問題化されている現代、人類が現在の生活レベルを維持しつつ、次世代も含む全ての人々に、より質の高い生活をもたらすことができる状態での開発を目指す教育のことである。

この教育を展開する上でベースとなるのが、自然という地域特性の二面性(恩恵と災害)を理解することである。そして、自



然からの恩恵をさらに享受しつつも防災あるいは減災するためには、各方面との連携が必要であることを学んだ。

このことは、新学習指導要領に対応した妙高ネイチャープログラムのあり方を模索していた外部研修指導員にとって大きな指針となった。

従来の妙高ネイチャープログラムは自然の事物・現象を個別のものとし、その理解に重点が置かれていた。しかし、ESDを意識して妙高ネイチャープログラムを見直したところ、事前の事物・現象の有機的なつながりを見出すことができた。

妙高ネイチャープログラムは、自然観察会で行われる自然観察とは一線を画する。学習指導要領に準拠し、学習者の既有体験、既習内容、興味関心などを踏まえた上で展開される教育活動である。そのことを確認するとともに、ぶれない方針を見出すことができた。

現在、妙高ネイチャープログラム外部研修指導員は24名が登録している。妙高ネイチャープログラムに、より高い教育効果を求める団体には、外部研修指導員を紹介するので、事前打合せ時に相談していただきたい。



源流体験『水を探究する』

1. はじめに

国立妙高青少年自然の家（以下妙高自然の家）周辺の自然環境を教材として展開する探究的な学習を妙高ネイチャープログラムと呼んでいる。この学習では、学習者が自ら課題を設定し、体験活動を通して得られた情報を整理・分析したり判断したりしながら、課題を解決する能力の育成を目指している。また自然環境を大切に、その保全に努めようとする態度の育成も図るもので、妙高自然の家独自の教育プログラムである。

現在、33種類の妙高ネイチャープログラムを提案している。平成21年度において、もっとも実施回数が多かったプログラムは「源流探検」であり、98団体2,440人が体験をした。この活動は、当施設の敷地内にあるイワナの里と呼ばれる渓流を、水しぶきを立てて遡るダイナミックかつ学習効果の高い活動プログラムである。

総合的な学習の時間で目標としている探究的な学習とは、直接体験あるいは間接体験によって、自ら抱いた課題を解決し、そこから新たな課題を発見し、探究学習がさらに展開されるもので、いわばスパイラルのように学習活動が深化していくものである。

水を探究する総合的な学習の時間の一環として、源流探検を行う小学校は多いが、

この活動で終了してしまい、新たな学習活動への展開があまり見られないのが現状である。

そこで、新学習指導要領に対応し、妙高ネイチャープログラムを取り入れ、探究的な学習が連続する総合的な学習の時間『水を探究する』を以下に提案する。

2. 総合的な学習の時間『水を探究する』

今年度、妙高自然の家は新潟県内A小学校第4学年と連携を図り、総合的な学習の時間『水を探究する』を開発・実践をした。本単元のねらいは、日常生活の中で使用している水の始まりを追い求める活動を通して、森林土壌の働きを学んだり、良質かつ豊富な水を確保するための森の手入れ活動を行ったりして、水源保全に努めようとする意識を高めることである。

3. 活動プログラムの具体的内容

源流探検

イワナの里と呼ばれる施設内の渓流で行う活動である。渓流に入る前に、身近な川との見た目の比較を行うとよい。「イワナの里の方が川幅は狭い」「川の両側には木が生えている」「川の水が透明だ」などの違いが挙がるだろう。

いよいよ川の中に入り、水を触ってみる。年間を通して8〜14の水温であり、とても冷たい水に子どもたちは驚き、様々な疑問が溢れ出す。「なぜこの川の水は透明な



のか」「なぜ水は冷たいのか」「どこから水は流れ出ているのか」などの疑問を解決するために、源流探検に出発しようとする問題意識を持たせて、源流探検を開始するといふ。

イワナの里の中間地点では、森林土壌から水が流れ出している様子を観察することができる。冷たく清涼な水が森林土壌より流れ出す様子を見て、森林土壌には水を貯める働きがあるのでないかと予想を立てるだろう。

森林土壌の観察

源流探検を通して抱いた予想を確かなものにするため、森林土壌を掘り出して触ってみる。すると湿っていることに気付く。それをビニール袋に入れ、しばらく放置するとビニール袋の内面に水滴がつく。このことから、森林土壌の中には水が含まれていることを確信する。

土壌の対照実験

森林土壌の水源涵養機能（水を蓄える機能と蓄えた水を一定量ずつ流出する機能）を調べるために、比較対象物



比較対象物



として、イワナの里の川砂を用いる。これは妙高山起源の火砕流堆積物であり、礫状の砂である。両者の手触りなどを比較すると、森林土壌は「根や枝が入っている」「湿り気がある」「ふかふかしている」などの特徴が挙がる。

2 ペットボトルの底を切り抜き、そこにそれぞれの土壌をほぼ同じ体積ずつ入れた。そして1の水を土壌に注ぎ込み、流れ出す水の様子や量を比較する。川砂と森林土壌を比較すると、森林土壌は少量ずつ長い時間をかけて流れ出す。また、土壌中の根や葉脈などの植物繊維の空隙に水がたまっている様子も観察することができ

る。この実験を通して、森林土壌の水源涵養機能や、森林は洪水防止にも役立つことを理解するだろう。

森の手入れ活動

前時では、日常生活水は森林土壌によって育まれていることを学んだ。本時は健全な森林土壌を育むための森の手入れ活動を行う。



まずプレゼンテーションを通して、元気な森は多くの生き物が棲み、水を蓄える働きがあること、元気な森は人間の手入れ活動によって作ることができることを学ぶ。

そして実際に自然

の家周辺の雑木林を元気な森に変えてみよう、森の手入れ活動を行う。6〜8名ずつのグループで活動する。A小学校児童の様子を見ると、指導者が促すことがなくても、どの木を残して切るかを相談しながら作業を進めていた。また大きな木を切るときには、互いに協力し、役割分担をしていた。このようにコミュニケーションを図りながら協同して作業をする様子が見られ、人間関係作りからもよい活動である。



A小学校児童の活動後の感想では「手入れをしたら、森の中に光が入ってすっきりした」、「ぼくたちのいつも飲んでいる水は

「水を探究する」指導計画(全23時間)

【活動名】 【活動のねらい】

課題把握
1時間

日常生活で使用している水道水はどのような場所で作られているかという課題をもつ。

浄水場見学
2時間

水道水が浄水場によって作られて、各家庭へ水道管を通して送水されていることを知る。

ダム見学
2時間

浄水場で作られる水はダムによって貯水されていることや、ダムは下流域の洪水・濁水防止、農業用水の確保などの働きがあることを知る。

身近な川の観察
2時間

川に棲む水生生物を探したり、河床の様子を観察したりして、身近な川に親しむとともに、川の水の始まりについて追究しようとする意欲を持つ。

源流探検
4時間

水生生物による水質調査をするともに、水の滴の様子を観察して、川の水は森林土壌から滴り落ちた水などであることを知る。

森林土壌の観察
1時間

森林土壌を採掘して、ビニール袋を使った実験や手触りなどから、森林土壌に水が含まれていることを知る。

土壌の対照実験
2時間

森林土壌と砂礫に水を通す実験を通して、森林土壌は水源涵養機能があることを確かめるとともに、洪水の防止にも役立っていることに気付く。

森の手入れ活動
3時間

森林の水源涵養機能を高めるために、森の手入れ活動を体験するとともに、森の手入れ活動は生物多様性の維持につながることを知る。

除伐木を使ったクラフト
2時間

森の手入れ活動で出た除伐木を使って、クラフトを作り、森林資源は有効活用することができることを知る。

ふりかえり
3時間

これまでの活動をふりかえり、体験したことや学習したことをまとめる。また、良質かつ豊富な水を確保するために、一人一人ができることを考え、具体的な活動プランを立てる。

発表
1時間

良質かつ豊富な水を確保するために、一人一人ができることを発表し、水源保全に努めようとする意識を高める。

= 妙高自然の家で体験可能な活動プログラム

森から始まっている「森を作ることは水を作ることに同じ」など、手入れ活動をしての充実感、水と森の関わりに気付く記述が多かった。

除伐木を使ったクラフト

森の手入れによって除伐した小低木やつる植物は、その場に伏せて置くのが基本であるが、木質資源を有効に活用することも環境教育の一環であると考え。そこで刈り出された枝を材料に「マイスプーン・マIFOーク」を作ってみてはどうだろうか。枝を適当な長さに切り、一端面に電動ドリルで穴を空ける。そこにスプーンやフォ

クの先端を差し込んで完成である。他にも「小枝のモックン」「ネームタック」など、かわいらしいアクセサリを作る活動プログラムがある。これらの詳細は妙高自然の家HPに掲載されているので、そちらを参照していただきたい。

4・最後に

一連の探究的な活動を通して、良質な日常生活水は森林によって育まれ、健全な森林は人間の手入れ活動によって作り出されることに、A小学校第4学年の児童は気付くことができた。

前述した妙高自然の家での活動プログラ

ムを行う上で必要な物品は、全て無料で貸し出しが可能である。また、これらの活動の児童への直接指導を行うことのできる妙高ネイチャープログラム外部研修指導員の派遣も可能であるので、事前打合せ時に担当職員へ相談していただきたい。

本展開は総合的な学習の時間の一例であるが、ぜひとも妙高自然の家を学習フィールドとして、学習効果の高い本物体験に取り組んでみてほしい。

なお、この活動を開発・実践をするにあたっては(財)河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けたことを申し添える。

第一次

第二次

第三次

第四次

スノーシューハイキング

冬の大自然へ飛び出そう!!



スノーシューハイキングの魅力とは!

森の中は春夏秋冬の間は笹や雑木に覆われ、整備された道以外はなかなか歩くことができません。しかし冬になり雪が積もると、一面が雪原に変わり、どこでも歩くことができます。新雪や深い雪の中でも、スノーシューを使うと、どこでも自由に行くことができます。だれも踏んでいない雪原を歩き、動物の足跡や糞、春を待つ木々の息づかいなど、厳しい冬を生きぬく自然に出会うことができます。自然の中をゆつくりと歩き、自然を五感で楽しむことができます。活動です。

また、有酸素運動で体の脂肪も燃やしてくれます。ダイエット効果にも最適です。幼児から高齢者まで気軽に楽しめます。

スノーシューとは!

ふかふかの雪の上でも、楽に歩ける便利な道具です。昔から雪国で使用されていた「かんじき」に似ていますが、プラスチック製で「かんじき」よりも縦に長く、浮力もあります。かかとも浮かして歩いたり、固定して歩いたり状況に応じて使い分けることができます。長靴のままスノーシューにセットすることができます。固定する方法もベルト式でワンタッチなので簡単です。

さらに、幼児用のスノーシューも開発されており、多様なニーズに対応しています。



スノーシューハイキングの対象
 幼児から高齢者までどなたでもOK

スノーシュー活動のねらい

冬の自然を楽しむ。(5感をフルに活用して)

冬の自然環境(動物の生活や植物の生育)を理解する。

運動を通して、体力の向上および健康増進を図る。

スノーシューハイキングの注意点

天候などの気象条件を事前に把握し、服装や装備品および活動内容を決めてください。

参加者全員に用具や活動エリアの説明をきちんとしてください。

ストックの先やスノーシューの裏は鋭利な金具が付いていますので注意してください。

活動エリア内、樹木の周りは雪が溶けやすく空洞になっている場合があります。活動コースや時間にゆとりを持って活動してください。



スノーシュー活動フィールド【国立妙高青少年自然の家では】

以下の活動場所は、順路や時間等の決まりはありません。活動に応じてプログラムしてください。

スノーシュー 3つのQ&A

Q1. スノーシューの装着は簡単?

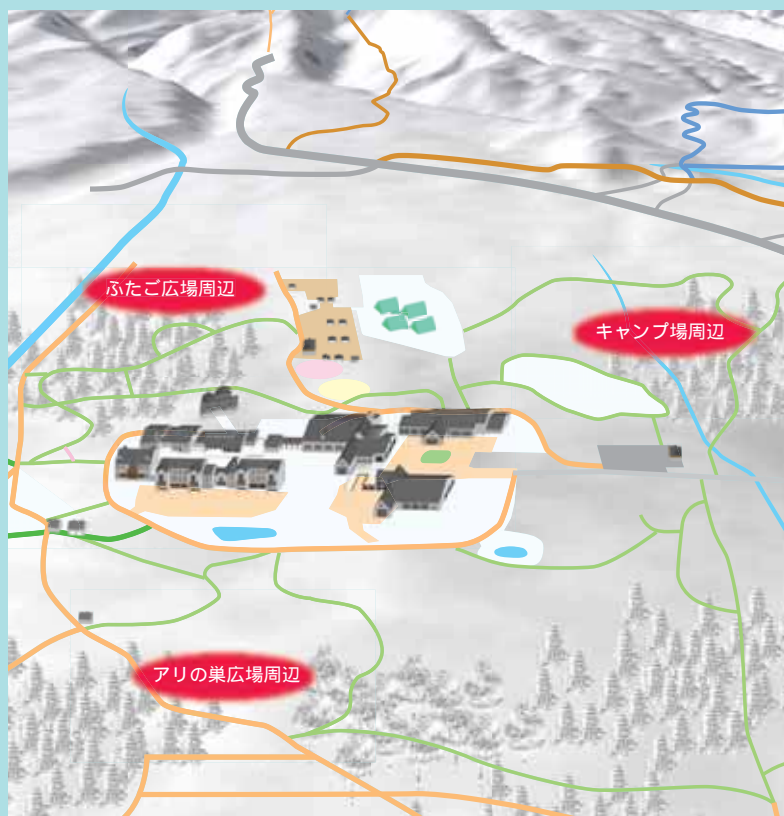
簡単です。長靴やスノーブーツに直接セットすることができます。固定方法もひもで縛ることはなく、ベルト式でワンタッチのものがほとんどです。幼児用は足を入れてかかとをゴムで固定するだけ。3秒で履けますよ!

Q2. スノーシューで歩くことは簡単?

簡単です。アルペンスキーやクロスカントリースキーは斜面があると滑ってしまいます。スノーシューは滑ることはありません。裏面が雪上をとらえやすく加工してありますので、安心して歩くことができます。

Q3. 歩くときにストックは必要?

ストックがあったほうが歩きやすいと思います。2本足で歩くより4本足で歩くほうがバランス良いですね。特に深雪や斜面のある場所では便利です。さらに上半身も上手に使うと全身運動にもなり効果的な有酸素運動ができます。



今年の冬はぜひチャレンジしてください。またご質問等お気軽にお問い合わせください。

MYOKOに 寄せられた声

「ここ来ると子どもたちが変わる」という意見を、たくさんの利用者からいただきます。皆様からいただいた声を糧に、私たちは今後も青少年教育を先導する国立の施設でありたいと考えます。

国立の施設としての存在意義が問われている今こそ、私たちは「自然の家には、子どもたちを変える力がある」ということをたくさんの人に知ってもらいたいです。



MYOKO という場所

NPO法人緑とくらしの学校
元妙高自然の家職員 蟹江 真耶

自宅からMYOKOに行く道のりが好きです。町並みを抜けると次第に道路沿いは田んぼから木々が茂るようになり、真正面に見える妙高山へ向けて車を走らせる清々しさ。そして取り付け道路に入り様々な表情を見せる落葉松の林を抜ける時、「この先に何があるのだろう」と胸が高鳴るのです。

私はこの道を何回も通り、そのたびにたくさんの出会いと新しい気づきがありました。

それまで当たり前身に回りにあった自然を、五感を使って体感すること、新しいことに挑戦する勇氣、お互いに尊重し意見交換できる信頼関係、やり遂げた後の爽やかな笑顔、ゴールすることではなくそこに向かうまでの道のりを大切にしたいと思う気持ち。これらはMYOKOにかかわり得られた私だけの財産です。初めて体験することも多く不安な時もありましたが、その時には美しい自然や周囲の方たちが温かく導いてくれました。一つ一つ実感できた時にそれまで知らなかった世界が広がり、その度に心の扉が開いたのだらうと思います。

ここはかけがえのない場所です。私にとってそうであったように、妙高青少年自然の家を訪れる方たちが、ここでの経験を自信に変えられるような場所であってほしいと思います。



あっという間に過ぎた MYOKOでの体験

南魚沼市立五十沢小学校
教諭(5年担任) 太田 裕樹

あっという間に過ぎた4泊5日の中で、どの情景にも目を輝かせているこどもたちの姿があり、その中で印象強く思い出されることが3つある。

一つ目は、トイレのスリッパ。乱雑になった初日のスリッパと当たり前のように並ぶようになったスリッパ。初日、校長先生が教えてくれた「履物がそろえば心が揃う」「出船、入船」の話を実行し続け、「思いやりリレー」においてさらにその思いは強化された。

二つ目は、涙いっぱいのお別れ会。我が子のように子どもたちを受け入れてくれた杉野沢の皆様と、民宿での体験が最終日に作った「未来の自分宛はがき」に書かれた家族や家庭の仕事を思う素直な言葉につながった。

三つ目は、集団生活の中で友達や先生に自分の本音をはっきりと伝えることが出来るようになったこと。

だれもが不安を胸にスタートしたが、この体験を通してその不安は大きな自信となった。この自信を胸に仲間と成長していくことを期待している。また、妙高自然の家の先生の方々、保護者の方々に心より感謝したい。



通称、妙高合宿！

上越教育大学
副学長 加藤 泰樹

【主な職歴】

昭和62年4月	東京家政学院短期大学講師
平成2年9月	上越教育大学学校教育学部講師
平成4年9月	上越教育大学学校教育学部助教授
平成13年8月	上越教育大学学校教育学部教授
平成15年4月	上越教育大学学校教育学部附属小学校長
平成19年4月	上越教育大学大学院学校教育研究科教授
平成19年4月	上越教育大学学校教育総合研究センター長
平成20年4月	上越教育大学学校教育実践研究センター長
平成21年4月	上越教育大学副学長

教師を目指す上越教育大学の学生諸君は、ここ「妙高自然の家」で思い出に残る研修合宿を行います。学部3年生たちはよいよ最終学年を迎えるにあたり、これまでの様々な学習活動や教育実習体験の成果を持ち寄り、仲間たちと共に意見を交わし、それぞれの志を新たに確認しあったり、進路について先輩たちから貴重なアドバイスを頂いたりする大切なひとときを過ごします。日常の学園生活から遠く離れ、この自然豊かな妙高山麓という非日常の中で、彼らは、誰からも邪魔されることなく、自然のゆったりとしたリズムの中でじっくりと物思いに耽ることが出来ます。あるものは満天の星空の下で遙か遠くを眺めたり、またあるものは朝靄の中でわけもなく散策したりと、それぞれの独りを楽しむにも絶好の場所です。自然に還ると誰もがなぜかピュアな気持ちになり、物事の出発点に立ち戻るように促されるものです。かくして今年もまたご厄介になります。

合掌



妙高の すばらしき仲間たち

国立若狭湾青少年自然の家
企画指導専門職 水澤 豊子

「私がやりましょうか?」「コース点検行ってきます」という職員の元気な声が事務室で飛び交う。雪の妙高自然の家の事務室で、最初に「これだ!」と感じたことだ。

「オモイ」を「カタチ」に。カタチにしたい想い、つまり、子どもたちに自然体験をさせたいという強い想いを一人一人の職員から感じる。

想いをもって真摯に取り組む姿勢、仲間が心を開いてみんなで協力する姿勢、これらは凜とした冬の妙高の山のようなすがすがしい。

勿論、完璧ではないし、同じ組織の仲間としてちょっと褒めすぎかもしれない。しかし、同じ組織の仲間だからこそ、忘れがちな心得を繁忙期でも実践している仲間を誇りと思うし、それを可能にしているシステムを手本にしたいと思うのだ。

私は、実地研修で1ヶ月間、雪の妙高自然の家に来た。よい土産を山ほど持ち帰ることができるだろう。



圧倒的な MYOKOの 自然

教育実習生 筑波大学
近藤 健太 / 上原 賢一郎

社会教育実習生として妙高に一週間お世話になりました。様々な業務体験を通して、仕事への態度から国立の青少年教育施設の意義まで、非常に多くのことを学ぶことができました。実習中、特に印象に残った活動は「スノーシューハイク」です。スノーシューを履き、坪岳山頂を目指して歩いた雪道では動物の痕跡を見つけ興奮し、山頂では眼前に広がる山並みに圧倒されました。言葉にできない数多くの魅力を、冬の妙高の自然に感じる事ができました。

また、今回は利用者として訪れるだけでは分からない自然の家の仕事の大変さも知りました。自然の家のすばらしさを感じるとともに、それが職員の方々の献身的な取り組みによって支えられているのだということも学びました。本当にありがとうございました。

子どもたちにもっと

「自然体験」をさせたい

目で見て、肌で感じて、脳や心・体全体で記憶して……

大人になって、「あ、懐かしい」と思えるような、

心に残る景色がここにはある。

国立妙高青少年自然の家はそんな子どもたちの

「自然体験活動」を全力でサポートします。

平成22年度

国立妙高青少年自然の家 事業・研修案内

国立妙高青少年自然の家では次代のリーダー育成を目的とした青少年対象の事業、青少年がよりよい体験活動を行えるよう青少年教育、社会教育関係者等指導者を対象とした事業、また、より多くの方に国立妙高青少年自然の家のプログラム等を知ってもらうための様々な事業を展開しています。

平成 22 年度募集型事業一覧

事業名	期 間	対 象	募集人数 (人)
【企画事業】 妙高ジュニア・アドベンチャー 2010	7月25日(日)~8月8日(日) 14泊15日	小学校5・6年生の男女	18名
【企画事業】 小学校長期自然体験活動指導者養成研修	前半 1泊2日×2回 どちらかを選択 9月18日(土)~9月19日(日) 9月25日(土)~9月26日(日) 後半 1泊2日×2回 どちらかを選択 10月30日(土)~10月31日(日) 11月 7日(土)~11月 8日(日)	小学校の長期自然体験活動の全体指導者(20歳以上)または補助指導者(18歳以上)として活動・協力する意志のある者	40名
【企画事業】 MYOKOボランティア養成所	7月10日(土)~11(日) 1泊2日	青少年教育に興味 関心がある者(高校生以上)	30名
【連絡協力促進事業】 豊かな体験活動推進フォーラム	11月13日(土)~14日(日)	教職員・社会教育関係者・ 一般・大学院生・大学生	100名
【連絡協力促進事業】 学社共同参画セミナー	8/10(火)~12(木) 2泊3日 2/25(金)~27(日) 2泊3日	大学生	30名 30名
【研修支援事業】 妙高プログラム体験会	年4回	当所利用団体指導者	各回30名程度
【研修支援事業】 心の冒険教育指導者養成研修	コース 6/12(土)~13(日) コース 6/11(金)~13(日)	教職員・社会教育関係者・ 一般・学生	コース 20名 コース 15名
【研修支援事業】 妙高ネイチャープログラム 指導者養成研修	7月2日(金)~4日(日)	教職員・社会教育関係者・ 一般・学生	20名
【研修支援事業】 ふるさと妙高とともに歩もう フェスティバル	10月2日(土)~3日(日)	一般・家族会員	2,000名

施設概要

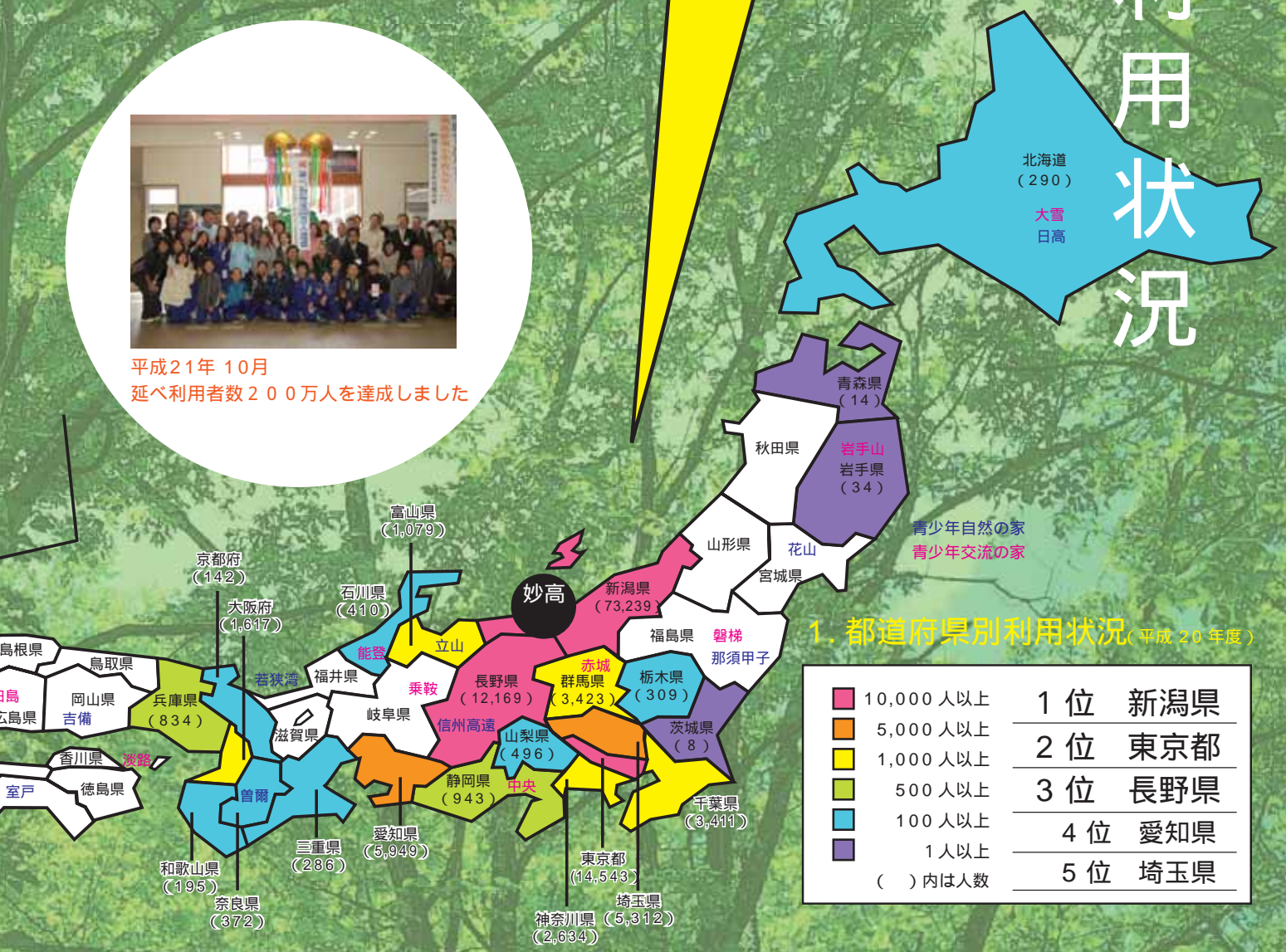
施設の概要と利用状況



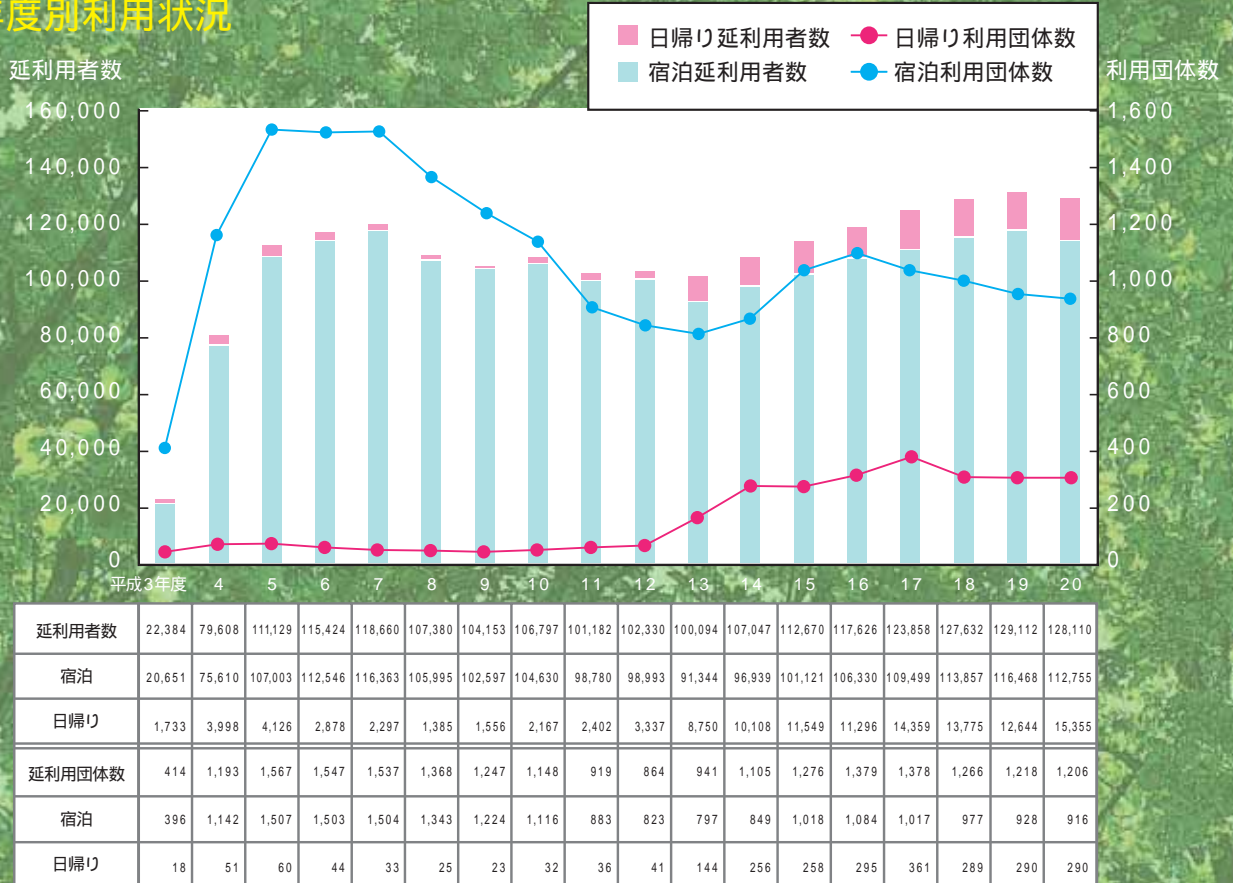
宿泊定員 / 300名 敷地面積 / 1,316,939m² 建物延床面積 / 13,594m²



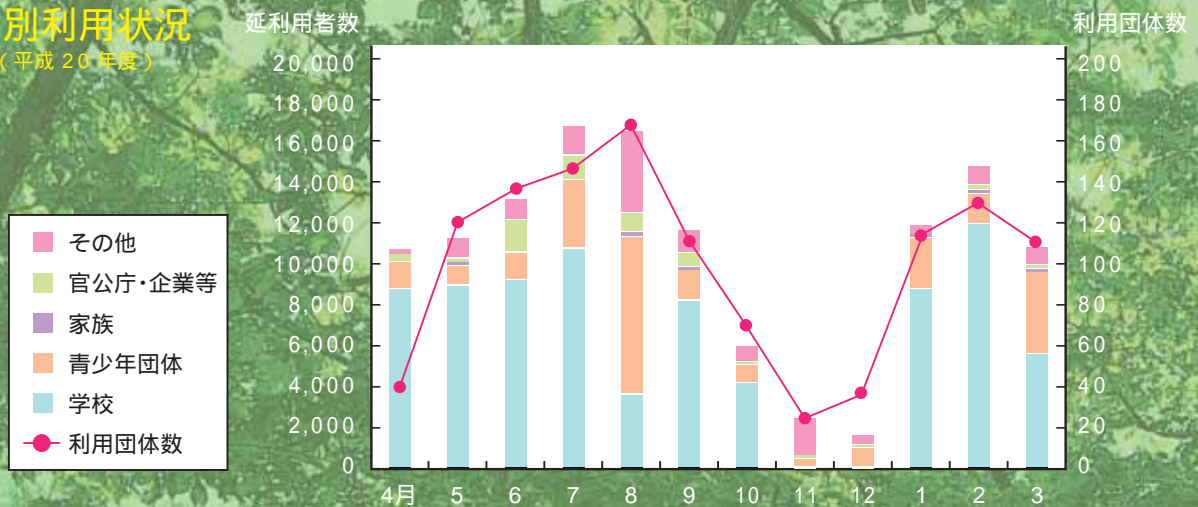
平成21年 10月
延べ利用者数 200万人を達成しました



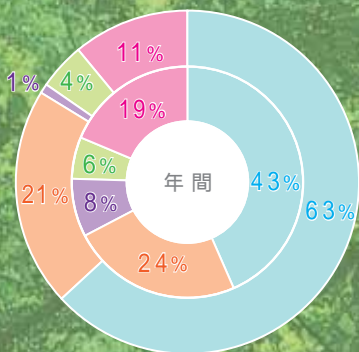
2. 年度別利用状況



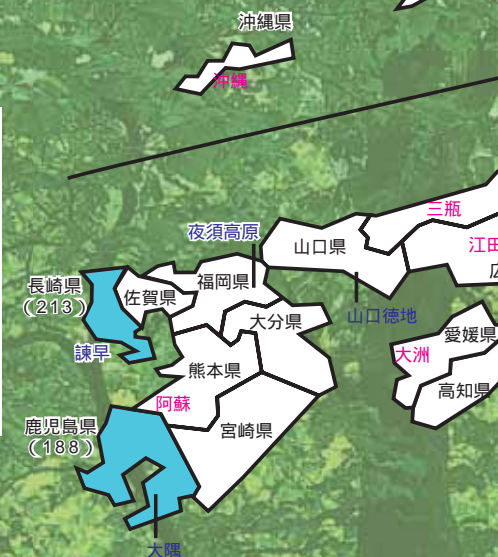
3. 月別利用状況 (平成20年度)



4. 団体種類別 (平成20年度)



区分	利用団体数	延利用者数
学校	525	80,660
青少年団体	288	26,423
家族	98	1,248
官公庁・企業等	67	5,642
その他	228	14,137
合計	1,206	128,110



「いい日常」がここにある

みなさん！こんにちは！！国立妙高青少年自然の家をご利用いただきありがとうございます。今年度も13万人近い方々が当施設でいろいろな活動に参加いただき、10月には、開所（平成3年）以来延べ200万人達成記念式典ができました。ひとえに全国の皆様方はもちろんこの施設がある近隣の市・教育委員会のご理解とご協力の賜物と感謝いたしております。

当自然の家は、学校の延長線上にある宿泊を伴う教育施設として、大自然の中で学校や家庭では日常経験することができない多様な体験（いい日常）を通して、次代を担うたくましく心豊かな青少年の育成を図りたいと考えています。

そここでお願いです。

もっと、もっと子どもたちを親元から自然に解き放ってください。いろいろな体験や活動をさせてください。人間本来の生きる力や豊かな感性を思う存分磨き、将来のびのびと羽ばたく子どもたちを創るうちはありませんか！

昨年の行財政刷新会議における事業仕分けで、業務内容の必要性等は認められたものの、施設の存続については地方もしくはNPO法人等への移管という方針が出ました。

私としては、まだまだ体験活動が世に浸透しているとは言いがたく、青少年期における自然体験や社会体験活動の必要性・重要性を今後とも機会あるごとに全国に発信していきたいと考えています。

平成22年3月

独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立妙高青少年自然の家 所長 川崎 幸一

私たちは子どもたちの自然体験活動を応援しています。

国立妙高青少年自然の家では、以下の方々から多大なご寄付をいただきました。
なお、ご寄付をいただいた場合は、サービス棟玄関ホールやホームページによりご報告させていただいております。

協賛金・支援金(五十音順)

(有)アイピーオート、家'Sハセガワ(株)、(有)内田紙店、(株)大谷ビジネス
大塚製菓(株)長岡出張所、岡本石油、(株)小川クラウン、頸南バス(株)、(株)謙信堂
高坂防災(株)、国際自然環境アウトドア専門学校、信越ペプシコーラ販売(株)上越支店
新星建機工業(株)、新東産業(株)上越支店、(株)第一印刷所上越支店、(株)高館組
(株)桐朋、(有)永田印刷、(株)ニッコトラスト、(株)パーツプロダクション
パナソニック(株)セミコンダクター社新井工場、(株)浜田材木店、早川雅雄
ホシザキ北信越(株)上越営業所、(株)丸山酒造場
三国コカ・コーラボトリング(株)上越支店、(株)妙高、
妙高観光開発(株)妙高カントリークラブ、(株)横瀬オーディオ、(株)渡辺リネン

助成金

笹川スポーツ財団業務部スポーツエイドチーム
助成事業名：ウォータースポーツエイド助成事業
助成課題名：妙高ジュニアアドベンチャー2009

財団法人河川環境管理財団(河川環境総合研究所)
助成事業名：河川整備基金助成事業
助成課題名：「新学習指導要項に対応した水環境教育プログラムの充実」

安藤スポーツ・食文化振興財団
助成事業名：第8回トム・ソーヤースクール企画コンテスト
助成課題名：妙高ジュニアアドベンチャー2009



特集！

子どもを

本気にさせる

アドベンチャープログラム

妙高ジュニアアドベンチャー2009



Open the Door! Vol.4

最新情報は...

国立妙高青少年自然の家

検索

